

みなと

今・むかし新聞

第9号

平成20年9月

時代を駆け抜けた

天璋院篤姫！



桜島は、鹿児島島の象徴的な山と言われている。錦江湾の遠くにみえる雄大な桜島は、一幅の絵を見るようです。（写真↑）

薩摩藩・島津家から第十三代将軍・徳川家定の御台所となりました「天璋院篤姫」は、この自然の大地のもとで、天真爛漫に成長したようです。鹿児島駅から四十分「薩摩今和泉駅」、そこが篤姫が幼年期を過ごした場所です。静かな海岸が広がり、閑静で風光明媚なところ。（写真↓）ここで、養育係の「菊本」から「女の生き方」を教わったと思います。作家宮尾登美子氏は小説『天璋院篤姫』の中でその菊



本が口にした言葉として「女の道は前へ進むしかない、引き返すのは恥でございます」と書いておられます。

篤姫江戸へ

篤姫は、嘉永六年十月二十三日、港区にありました「薩摩藩・芝屋敷」にお着きになりました。鹿児島で浚刺とした元氣な女性が「將軍家」に嫁ぐため江戸へ来ましたが、なかなか婚姻の日取りが決まりません。安政二年十月の地震のため建物がかかり被害を受けたために、住まいを「芝屋敷」から「渋谷屋敷」へと移しました。

篤姫やつと婚礼の日を迎える

その後、安政三年十一月十一日、婚礼のため、渋谷屋敷から堀田坂・北条坂・テレ朝通り・外苑東通り・飯倉交差点から新橋へと行列は続き、桜田屋敷で休息後、江戸城へと向かいました。その婚礼のコースをご紹介します。

堀田坂

佐倉藩堀田家の屋敷がありました場所です。（写真↓）幕末になると「北海道開拓使第三官園」として利用されま



した。ここは「麻布の開拓使牧場」と呼ばれ牛・羊・豚を飼育しておりましたが、明治十五年に無くなりまし

た。今は、日赤医療センターや民間のマンションが建っております。このあたりは「緑」豊かな場所です。高

い樹木が適当な間隔で植えられており、真夏であつてもギリギリした夏の太陽を遮り、一服の涼風が暑さを奪ってくれます。まさに人々にとりまして「オアシス」です。

飯倉交差点は、江戸庶民が歩いた場所

南にいくと「赤羽橋」、久留米藩有馬家の屋敷がありました。さらに「赤羽接遇所」があり外国文化を学べる場所でした。篤姫は、「北」に方向をとり、虎ノ門方面に向いました。一旦坂を上るとすぐに下り坂となります。下りきる少し手前、道の左手に「西久保八幡神社」があります。お社は高台にあります。（写真↑）

なお、その場所

で縄文時代の「貝塚」が見つかり、その一部が「港区立港郷土資料館」に展示してあります。



薩摩藩・桜田屋敷で、休息を！

薩摩藩は、徳川家から敷地を下賜され、ここに桜田屋敷を建てました。「装束屋敷」とも言われていました。桜田屋敷には、二代将軍・秀忠や三代将軍・家光が訪問したそうです。徳川家と島津家との密接な関係がよくわかります。

明治になって、その屋敷跡に「鹿鳴館」が建ち、舞踏会が頻繁に開かれて、政府高官や外交官等が集まる「紳士淑女」の華やかな社交場となりました。現在、その場所は鬱蒼と生い茂った緑豊かな中に民間企業のビルが立っています。

なお、婚礼の行列は、日比谷御門を通過し、八代洲河岸、龍ノ口、酒井雅楽頭邸前を通過して、平川口から江戸城へと入りました。先頭が江戸城に着きましても渋谷屋敷には未だ出発しないグループがあつたそうです。

御婚礼は十二月十八日、盛大に執り行われました。その記録は『徳川実記』に載っております。

（清田 和美）

区内あちこち

銭湯に行こう！

ちよつと昔の町中でなら、ご近所に在るのが当り前だったのに気がつくと姿が消えてしまったものが沢山ある。生活のスタイル変化で役目を終え退場して行つたのだが、そんな中、めつきり数が減り忘れかけられていると思いきや、ドッコイ根強い支持に後押しされ頑張っているのが銭湯である。

区内では七軒（休業中の一軒を含む）が盛業中である。各湯それぞれに工夫がこらされて特色を出している。銭湯好きには有難い。

ランニング・シャツ・半ズボンで通つた風呂屋も、残念ながらいまはそうもいかない。少し先まで電車・バスで出掛けるからだ。

ところが、そのお蔭で行動範囲が広くなり、A湯に行つたり、気分次第でB湯にしたりと気ままな銭湯巡りをするようになり、手拭い・石鹸を持ち歩くことをおぼえた。

散歩の仕上げに家庭風呂とは一味違う、広くゆつたりした空間・大きな湯船にたつぷり張られた少し熱い目な湯に肩までつかり、手足をいっぱいに伸ばせば歌の一つも浮かれ出ようというものだ。

「黒湯」「葉湯」「気泡風呂」「電気風呂」などなど、特色の一部である。現在の銭湯を体験して自分流の楽しみ方見つけに行きませんか。はまってしまうかもしれませんよ。

銭湯の数をこれ以上減らさないためにも。

（武 恒雄）

☆区内の銭湯とその所在地☆（アイウエオ順）

清水湯（休業中）南青山3の12の3

高輪浴場 高輪2の6の2

竹の湯 南麻布1の15の12

玉菊湯 白金3の2の3

万才湯 芝5の23の16

ふれあいの湯 芝2の2の18

三越湯 白金5の12の16

（清水湯は改築中で来年4月再開予定）

昔と今を語る『私の芝浦』

私の子供の頃、芝浦のイメージは海運荷役の労働者が集う街、工場と倉庫が建ち並び、物流の輸送路としての運河には石炭を満載したダルマ船の姿が見られ、空き地の多くが石炭置場になっていました。埋立地から作られた街は道路も広く、田町駅芝浦口を降りますと涼しい潮風が吹き渡りほっとしたものでした。

私の祖父が昭和7年「港屋」という屋号で釣舟や貸ボートで遊船業を始め、19年5月25日空襲で家も船も灰になるまで穏やかな芝浦での生活がありました。

芝浦小学校も丸焼け、当時の一年生だった私はバラックの教室で二部授業、疎開から戻った子供で満員になると南海小学校の教室を借り勉強しました。何もない不自由な時代でしたが空地や野原には自然が溢れていました。

運河は一時期は海水浴もでき、干潮になると棧橋から川へ下りてごかいを堀り、満潮には海水が棧橋に続く階段の下までひたひたと、めだかの群れが泳いでいました。

石けり、縄飛びと暗くなるまで走り廻って遊び、夜は縁台での夕涼み、近所の人が集まり涼しい風が吹き抜ける中、夜空を仰ぐと満天の星、話に花が咲きました。こうもりや蛍の飛んでいた時期もありました。

昭和39年東京オリンピック開催時期から40年代の高度経済成長期にかけて運河も工場排水で汚染され悪臭のする芝浦となり、一時期はイメージも悪くなり住みづらくなりました。

平成3年8月に完成したレインボーブリッジに依り、芝浦とお台場がウォーターフロントとして脚光を浴び今日の超高層マンション群が林立する芝浦へと発展しました。

埋立地芝浦は輸送路としての運河と海運荷役の街として古くから発展し、そして今私達の生活に欠かす事の出来ない企業や施設が多く築かれ、都心に近いことから、港町としてだけでなく巾広い役割を持つ街となっております。
(高橋 邦子)

桜田小学校 塩原へ疎開した直後の献立記録 記録：岸田林太郎（当時教諭）

昭和19年	朝	昼	夕
8月 30日	ごはん みそ汁 (なす) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん かぼちやの煮付け おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん みそ汁 (なす・じゃがいも) おしんこう (なす・きゅうり)
	ごはん みそ汁 (なす・じゃがいも) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん なすの煮付け (油炒め) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん 葉のごまよごし おしんこう (なす・きゅうり)
9月 1日	ごはん みそ汁 (なす) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん じゃがいもの煮付け おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん 煮物 (きやべつ・みょうが なす・じゃがいも) たくわん
2日	ごはん みそ汁 (じゃがいも) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん 煮豆 おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん きゅうりの ごまよごし おしんこう (なす・きゅうり)
3日	ごはん みそ汁 (じゃがいも) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん 精進揚げ (かぼちや) おしんこう (なす・きゅうり)	ごはん みそ汁 (なす) たくわん

その他 9月1日夕食時…鮭缶 9月2日おやつ…ふかしパン

◎東京瓦斯株式会社

明治6年芝浜崎町瓦斯工場建設。最初は燈火用。明治18年会社創立。明治43年芝浦一丁目に一万坪のガス製造所設立。

◎放送発祥の地

大正14年3月22日9時30分、田町駅前東京芸学校より日本最初の放送電波が発信。

◎日の出埠頭

大正12年9月の関東大震災の際罹災者への救援物資や復興資材の荷揚げ場で臨時貯蔵所。その後二年間の工事で日の出埠頭として竣工。

◎竹芝埠頭

大島をはじめ伊豆諸島への東海汽船の発着場。

◎下水道局芝浦処理場

港南一丁目。昭和3年11月竣工。港区をはじめ都内の広い地域の排水を処理。

◎中央卸売食肉市場

高浜町。昭和11年7月竣工。

◎南極探検家 白瀬 矗（しらせ のぶ）

明治43年11月 開南丸で芝浦港出港。



「芝浦駅」をご存知でしたか。

この写真の建物の屋根に「芝浦駅」という看板がのついています。でも、芝浦駅なんて知らない、聞いたことすらないという方が多いのではないのでしょうか。

旧国鉄正規の駅です。昭和5年に芝浦埠頭に貨物専用線が新設され、そのとき誕生したのです。昭和60年にこの貨物線は廃線となったことでこの駅も姿を消しました。

自分で写真を撮っていながらこの建物がどこにあったのか、正確な場所を思い出すことができません。なお、この貨物線の線路があった上を今「ゆりかもめ」が走っています。
(井上 繁)

戦時下、疎開児童はどんなものを食べていたか

この前の大戦の末期、都内の子供たちを米軍の空襲から守るため、小学3年生から6年生までの児童を集団疎開させました。小学校毎にまとめて地方へ移住させたのです。

国内の食糧事情は悪化しておりましたから、田舎へ行ったからといって、子供たちが口にした食事は粗末なものでした。

上の表をご覧ください。おかずは一汁か一菜に漬物。肉とか卵とか魚とかおかずらしい物は全くなし。いや五日間の中で只の一回だけありました。缶詰の鮭！ おやつにしても、たったの一回、それも小麦粉を丸めて蒸しただけのパンで、ジャムやバターなど気のきいた物はもちろんありません。

でも、この表は昭和一九年の夏、疎開が始まってすぐのことです。まだ良かったのです。朝、昼、晩の三度とも、ごはんが出ています。戦争の状況が悪化するにつれてお米は不足する一方でしたから、お粥や、ごはんと言ってもサツマイモや大根を刻んでお米に混ぜて炊いたものや、ときには蒸かしたサツマイモだけということもありました。

今の時代からは全く想像できないことと思いますが、幼い年齢の子供たちが親から離され、不慣れた土地で、満足な食事を与えられることもなく、昭和二十年八月戦争が終わり帰京することになるまでの一年間集団生活をしていたのです。
(一)

生涯学習センター通信

今年のNHK大河ドラマ「天璋院篤姫」は毎回二十五パーセント前後もの高い視聴率を維持しております。歴史上の人物としてあまり知られておりませんが、幕末から明治にかけて、日本の夜明けに大きく影響を与えた女性として高く評価されるようになりました。

第十三代將軍・家定の御台所として、安政三年十一月薩摩藩・渋谷屋敷から六本木・飯倉・虎の門・新橋と通過して内幸町の薩摩藩・桜田屋敷で休息なされたのち、日比谷御門を経て平川門から江戸城へ入りました。この「婚礼ルート」の七割が港区内でした。郷土史の一ページを飾っております。

語り部の学習会は当センター二階の「さくらだ記念室」で毎月、第二・第四水曜日の午後二時から開催しております。関心ある方々の参加をお待ちしております。
(K)

問い合わせ 03・3431・1606
発行 平成二十年九月一日
港区立生涯学習センター